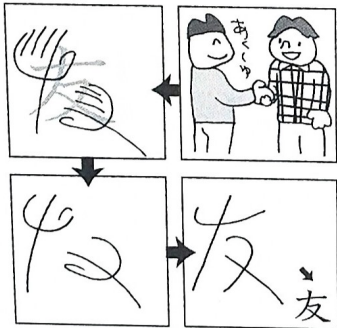




これが遊びいっぱいの漢字学習法

—— 小学校一年生でも小学漢字一〇〇六字をマスター ——



言葉の豊富な子供ほどどんどん伸びる

学校の給食の献立表に「むしぱん」とかなで書かれていたため、「虫の入っているパンが出てくるのかと心配しちゃったよ」と嘆いた生徒がいたそうです。これは、その子供が「むし」といえば「虫」だけで、「蒸し」という言葉があるのに気づかなかったことから起ったことでしょう。

このように、私たちは、言葉(専門的には「ないげんご内言語」といいます)でものこことを考え、認識しています。ですから、言葉の豊かな子供は、思考の幅が広く正確になります。

このとき、言葉を頭に蓄え、その意味を理解し、ものごとの概念を正しく認識するには、日本語では何とについても漢字の力を高めることがカギを握ります。

たとえば「しかく」という言葉を想像してください。そのときどきに応じて、この言

葉を正しく認識するには、「四角」「視覚」「資格」「死角」「刺客」といった豊かな漢字力がベースになければなりません。

ところで、岸本裕史氏(学カコンサルタント)が、小学生を対象に、知っている言葉の数と成績の関係を調べた、非常に興味深いデータがあります。

それによれば、小学一年生では、五段階評価の成績の上位〔5〕〔、中上位〕〔4〕〔、中位〕〔3〕〔、中下位〕〔2〕〔、下位〕〔1〕〔の順に、語彙数ごいすうが七〇〇〇、四〇〇〇、三〇〇〇、二〇〇〇、一〇〇〇〇となりました。何と、上位と下位では三倍以上の差があったのです。

一方、小学六年生を調べてみたところ、成績の順に、語彙数が三七〇〇〇、二〇〇〇〇、一六〇〇〇、一一〇〇〇、八〇〇〇でした。やはり、上位と下位では三倍以上の差が認められました。

この結果、「知っている言葉の数の多い子供ほど、成績がよい」という傾向が明らかにされたのです。

さらに、「読書量の多い子供ほど、成績がよい」というデータも出ています。これは、六学年全体を対象に、月間読書冊数を調べたもので、成績が上位の子供では三八〜八〇冊、中上位では一〇〜二〇冊、中位では三〜五冊、中下位では一〜二冊、下位では〇冊でした。

もちろん、学校の成績だけで子供の能力を測ることはできませんが、岸本氏の調査は、少なくとも成績のよい子供ほど、知っている言葉の数が多く、読書量も多いことをはっきり表しています。

日本語は、その特徴として、内容の深い言葉の多くが漢字を基本にして作られた「漢語」です。ですから、漢字に強くなるほど内容豊かな言葉をたくさん蓄えること

ができます。

そうすれば読む力がついて、おのずと読書の楽しさに目覚め、読書量も増えますので、国語力が高められます。その国語力が他の教科の理解力を高めますので、全体的に学力が向上してくることはありません。

ところが、小学校に入った子供たちが受ける国語教育、とりわけ漢字教育には大きな問題があります。

小学校一年生が学ぶべき学年別配当漢字は、わずか八十字です（小学校六年間では合計で一〇〇六字）。この数字に限定されているのは、読める漢字は同時に書けないといけないという考え方（つまり「読み書き同時学習」で国語を教えているためです。しかも、この「読み書き同時学習」で子供に教えようとする、「交ぜ書き」という極めて効率の悪い学習を余儀なくされます。

たとえば、はじめにでも触れましたが、「予防注射」という漢字を学習する場合、小学校一年生と二年生の配当漢字表には、四つの漢字はどれも含まれていないために、「よぼうちゅうしゃ」とすべてひらがなで習うこととなります。

三年生になると、「予」と「注」という漢字は習うので、「よぼう注しゃ」と交ぜ書きで表記することになります。

五年生になると「防」という漢字を習うので「予防注しゃ」となり、六年生になって射が出てきてやっと「予防注射」とすべてを漢字で表記できることとなります。

こうして、「予防注射」と表記して読みと書きができるまでに何回も習い直すわけですから、これを能率が悪いと言わずして何と言おうでしょう。それに子供だって混乱するばかりですし、だいたい途中で飽きてしまうでしょう。

これを解決するには、読みと書きを別にして、最初から「予防注射」として表記し、一年生から読ませるようにするだけでいいのです。こうすれば、どんなに簡単にこの言葉を覚えられるか、容易に想像がつくでしょう。

実は、こうした「交ぜ書き」が教育現場で用いられてきたのは、幼い子供ほど漢字よりひらがなのほうが覚えやすいだろうという誤った考えがあるからです。くわしくは、のちほど述べますが、事実はまったく逆なのです。○歳や一歳の子供でさえ漢字ならば絵を見るように喜んで覚えてしまうのです。

漢字は楽しくマスターできる——漢字には情報や意味が満載

小学生の子供をもつ親御さんに、「漢字」に対して、どのような感じをもっていますか——こう質問すると、「字の形が複雑で、覚えるのが難しい」「漢字の勉強は丸暗記



しなくてはならないから、つまらないし、つらいものだと思う」といった否定的な答えが返ってくるのが少なくありません。

漢字の勉強は本当に、漢字ドリルに代表されるように、ひたすら反復練習するしかないのでしょうか。それは、大きな誤解です。学校でそのような教え方をしているから、そうするものだとは決めてかかっているだけのことです。

漢字は、もっと楽しく学べるものです。漢字の多くは二つ以上の基本的な漢字の組み合わせで、その一つひとつに多くの情報や深い意味が込められています。漢字のもつこれらの「情報」や「意味」を手がかりに、その漢字を興味深く、楽しくマスターすることができるのです。たとえば、「雪」という漢字を考えてみましょう。見てのとおり、「雨」と「ヨ」とを組み合わせてできています。「ヨ」は、実は「手」の形を表した字です。雪が空からふわふわと綿のように舞い降りてきて、手の平にそと載る光景を想像し

てみてください。そうです、雪という漢字は「手に載るようになった雨」としてイメージすることでできあがったものなのです(2章七二頁参照)。とても詩的だと思いませんか。

それから、子供のころ「右」と「左」という漢字を習ったとき、同じような字形をしているのに書き順が追っているのを不思議に思ったことはありませんか。実は、これも漢字の成り立ちを知ってみると、なるほどと手を打ってしまいます。

そもそも「右」と「左」という漢字は「右手」と「左手」を表す漢字なのです。「右」は、右手の形を表した↓ヌ↓ナ」と、「口」とを組み合わせたもので、「食べ物や物を口に運ぶ手」を意味します。一方、「左」は、左手の形を表した↓ト↓ナ」と、物差しを表した「工」とを組み合わせたもので、「物差しを持つ手」を意味します。

ですから、「右」と「左」では書き順も異なり、「右」が「ノナオ右右」、「左」が

“一ナヲ左左”となります(2章六〇頁参照)。

こうして、漢字一つひとつの成り立ちや意味を理解していくと、「そういうことだったのか」と合点がいきます。ひいては、初めて見る漢字でも、「こういうことかもしれない」と推察できるようにもなります。まるで「なぞなぞ遊び」でもしているような楽しさがあります。子供は、なぞなぞ遊びが大好きですから、こんなふうに漢字に接することができれば、漢字を学ぶことが楽しくなり、おのずと漢字を学ぶことが楽しくなり、おのずと漢字も好きになるだろうと思います。

漢字はひらがなよりやさしい——大脳生理学が理論的に裏つける

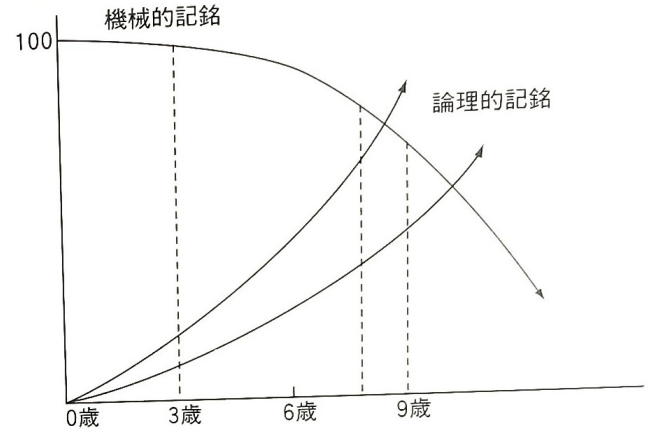
では、漢字とひらがなでは、どちらがやさしいと思いますか。はっきりしているのは、「読み」と「書き」のうち、少なくとも「読み」については、小学低学年までは、漢字のほうがひらがなよりずっと覚えやすく、興味をもちやすい文字であることがわかっています。これは、大脳生理学的な見地からも明らかにされていることなのです。

まず「小学校低学年までは」という“期限”に注目してください。

私たち人間がこの世に生まれ出たときの脳は極めて未熟な状態であり、そこからどんどん発達していくわけですが、臨界期といって、一定の時期までに習得しなければ獲得できない能力があるとされます。

たとえば、ピアノの微妙な音階の違いを判断できる臨界期は六、七歳までではないかといわれています。

人間の記憶力についていえば、たとえば、次頁の表を見るとわかりますように、機械的記銘(記銘とは、経験したことを印象として刻み付けることです)と、論理的記銘では、その発達にかかわる脳の場所も時期も異なることがわかっています。



「丸暗記力」は0～3歳がもっとも高い

機械的記憶の力は〇〜三歳がもっとも高く、「丸暗記力」ともいいます。興味がわかば、何でも即座に記憶してしまう能力です。

赤ん坊の脳は未熟ですから、自分を取り巻く生活環境を無条件に記憶し、模倣することで、人間として生きていく能力を身につけていくこととなります。

ですから、この時期に丸暗記力が最高というのもうなづけます。これは、小学校低学年に当たる七、八歳くらいまで高い水準

を示します。

もう一つの論理的記憶の力とは八、九歳くらいからぐんと育つ、理づめで考える能力をいいます。物事を論理的、体系的に理解し、認識する能力です。この八、九歳くらいの時期は、自分で考え、自分を主張し、自主的に行動するようになります。自我の発現や創造の精神ができあがる時期とも重なっています。

さて、漢字は意味やイメージを具体的に表していますから、幼児〜小学校低学年の子供には絵を見るのと同じように抵抗なく受け取れます。たとえば「山」は、現実の山と同じように受け止められます。いわば漢字は「目で受け取る」言葉（視覚言語）なのです。一方、ひらがなやカタカナは、一字一字が音を表すだけで、何の意味もありません。ですから、幼児〜小学校低学年の子供の興味や関心を強く引くのは、ひら

がなやカタカナよりも漢字ということになります。

しかも、漢字は複雑な形をしているので、記憶の手がかりが多く、それ故に、かえって識別しやすいのも特徴です。したがって、漢字を読むことだけでいえば、丸暗記力に優れた幼児期〜小学校低学年の時期は、意味のないひらがなやカタカナよりも意味のある漢字のほうがやさしくマスターできることがわかりただけだと思います。

読み方から教えるのが最善——脳の働く経路が異なる

私は、幼児期〜小学校低学年の子供に(延べ数十万人を数えます)、次のような実験を試みています。これによっても、「漢字の読み」を教えるのは、この時期がもっとも適当という結論を得ています。

実験では、「中」「虫」「蟻」と書いたカードを用意します。そしてまず、それぞれのカードを見せながら、私が、「なか」「むし」「あり」と読みあげます。次に、カードを見せながら、子供たち自身に読みあげてもらいます。

その結果、子供たちは、どの漢字の読み方をいちばん覚えていたと思いますか。正解は「蟻」です。次に「虫」、その次に「中」の順となります。

自分の生活の中で具体的に知っている「蟻」にもっとも興味が引かれると同時に、先ほども述べたように、字形が複雑で記憶の手掛かりが多いので、いちばん覚えやすいのです。「虫」は抽象的な言葉であり、虫そのものは存在しませんから、実際に存在する「蟻」よりも覚えにくいのだと思います。同じく「虫」と「中」では、字形のより複雑な「虫」のほうが覚えやすいので、こちらに軍配があがったのだと思われれます。ですから、教えるときは、「蟻」↓「虫」↓「中」の順にするのが得策です。

もう一問。「九」「鳥」「鳩」では、どの漢字をいちばんよく覚えていたでしょうか。そ

うです。ほとんど例外なく「鳩」↓「鳥」↓「九」の順で覚えていきます。

具体的に馴染みのある物であれば、字画の多い漢字でも、読むのを物ともしないのは、見た物をそのまま記憶できる丸暗記能力に優れた、小学校低学年までの時期ならではの得意技です。このすばらしい子供の得意技を生かさない手はありません。にもかかわらず、それをしてこなかったのが、漢字教育の実情なのです。

なお、漢字を「読む」と「書く」のでは、それを処理する脳の経路が異なります。漢字を「読む」のは、「目で見る」↓「意味を理解する」という単純な経路で済むのに比べて、漢字を「書く」のは、書こうとする漢字を「音でとらえる」↓それを「目に見える形にする(全体像をとらえる)」↓「漢字に組み立てる」↓「手の動きの記憶につなげる」という複雑な経路をたどることになります。それだけに、私が提唱する「石井式漢字教育」では、まず読み方から教える「読み先習」を実践しています。最近では、文部科学省でも遅蒔きながら、本格的とはいえないまでも、この「読み先習」を取り入れるようになっていきます。

学力アップは漢字学習から——漢字力がすべての学科の基礎

漢字力は、「文章を読む」「文章を読み取る」ための基礎能力となるもので、すべての教科に直接的にかかわる意味でも非常に重要です。

ことわるまでもなく、国語はもとより、算数、理科、社会などの授業も、「教科書を読む」ことから始まります。教科書が読めないということは、内容を理解するための第一歩でつまづいてしまうことにはかなりません。これでは、授業についていけなくなるのは火を見るより明らかです。

ところで、昨今、学校の先生たちが、「教科書の読めない児童が多くて困る」と悩ん

でいるといつて大きな問題になっています。算数にしても、計算はスラスラできたとしても、問題文に基づき計算式を立てて解くといった問題になると、文章が読み取れないために、計算の前に数式が立てられないケースが増えているというのです。

日本の子供の学力が全般的に低下していると指摘されていますが、これも、「教科書が読めない」児童が増えていることと無関係でないはずで

こうした由々しき事態を招いている最大の原因として考えられるのがずばり、漢字力の弱さです。漢字が読めないことにより、文章を読み取る力が培われないことになっていきます。ですから、すべての教科にわたって学力を上げるには、何といつても漢字に強くなることであり、読解力をつけることが基礎になります。

授業の内容についていければ、おのずと好奇心や探求心もふくらみ、勉強が楽しくなるものです。学校生活を充実させるためにも、子供たちに漢字に強くなってほしいと思います。そのためには、漢字力をつける絶好のチャンスである、幼児〜小学校低学年での漢字教育をないがしろにするわけにはいかないのです。

“漢字かな交じり文”は読解力を高めるすばらしい表記法

日本人が優秀なのは、「日本語が漢字とひらがなで綴られる“漢字かな交じり文”で書かれるためである」と指摘されることがあります。

次に紹介する『いろは歌』を読み比べてみてください。

いろはにほへとちりぬるを

わかよたれそつねならむ

うゑのおくやまけふこえて

あさきゆめみしゑひもせず

色は匂へど散りぬるを

我が世誰ぞ常ならむ

有為の奥山今日越えて

浅き夢見じ酔ひもせず

ひらがなだけで綴ったものと、漢字かな交じりのものと、どちらのほうが意味がわかりやすいかと聞かれて、後者に手を上げるのに異議を唱える人はいないでしょう。

漢字は“目で見る言葉”ですから、目で見て意味やイメージを把握することができます。「色」という漢字を見ると、“色”のイメージが浮かびます。そして、ひらがなが交じっていることで、文章の中で漢字(＝意味)がクローズアップされるため、認識することがよりスムーズになり、文章の理解がより簡単になります。

ひらがなだけ、もしくは漢字だけの文章というのは実に、読みにくいものです。

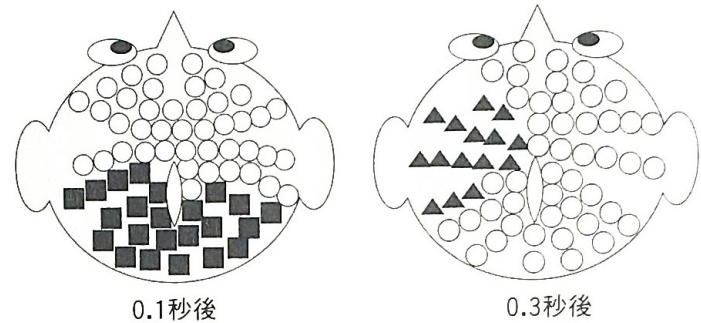
漢字かな交じり文こそ、優れた読解力を生み出す母体であり、世界に誇れる表記法と明言できます。

ところで、漢字かな交じり文では、漢字(＝意味)を拾いあげていくのがスムーズになると述べましたが、これはいい得て妙で、私たちの脳は、漢字とひらがなでは、漢字のほうが早く反応することがわかっています。

ここに、東京電機大学とNTT基礎研究所が共同研究により、「漢字と“かな”に脳がどのように反応するか」を調べた、興味深い報告があります(次頁の図参照)。

その報告によると、私たちの脳は、漢字に対しては○・一秒で反応していますが、かなに反応するまでには○・三秒と、三倍時間がかかっています。

では、なぜ、かなのほうが反応するまでに時間がかかるのでしょうか。これは、漢字



■漢字単語を見た時に、より活性化する脳の領域
 ○漢字単語とかな単語で活性化に差がない領域
 ▲かな単語を見た時に、より活性化する脳の領域

漢字とかなに反応する脳の場所と反応時間(日本経済新聞より)

が“表意文字”であり、かなが“表音文字”であることに起因します。

私たちが、ひらがなを見ると、その文字をいったん音声化してから意味を認識することになります。ところが、漢字を見たときは、直接的に意味がわかります。“音声化”のプロセスを必要とするか、しないかで、脳の反応の時間差が生まれるのです。

漢字かな交じり文は、“意味”と“音”のメリハリにより、一層、“意味”をとらえやすくしているといえます。

この研究報告ではもう一つ、驚くべき事実が明らかにされています。

ご存じのように、私たちの脳は右脳と左脳に分かれており、それぞれ役割を分担しています。右脳は全体を把握するのが得意で、一目でパターンをとらえることに優れています。絵やイメージは右脳で処理されます。片や、左脳は細部にこだわり、複雑なパターンを分解するのが上手です。言葉や文字は左脳で処理されます。

さて、研究報告に戻りますが、ひらがなに対しては、確かに左脳だけが反応しますが、漢字に対しては左脳と右脳の両方が反応していることが判明したのです。

たとえば、「山」という漢字を見たとき、「山」の絵やイメージが浮かぶのは、右脳が機能していることの証しですし、それを山を意味する文字として理解するのは左脳の働きです。

これは、注目に値します。特に小学校低学年までの子供や、知的障害児、自閉症児

などは、右脳が優位といわれます。ですから、彼らは漢字をイメージとしてとらえるのがとても速く、その分、その漢字の意味を左脳で理解するのも速くなります。つまり、ひらがなよりも漢字のほうがやさしくて、吸収しやすいといえるのです。

「漢字」は家庭教育で教えるものと覚悟すること

漢字は低学年のうちほど覚えやすいといいました。しかし、学校では当然ながら、低学年のうちに優先して、小学校でマスターしなければならない漢字の、それも読み方だけをまとめて教えるといったことは、今のところ実践されていません。

小学校一年生から六年生まで、各学年ごとに学習すべき「学年別配当漢字」が定められていて、その「読み」と「書き」を同時に勉強することになっています。一年生は八〇字、二年生は一六〇字、三年生は二〇〇字、四年生は二〇〇字、五年生は一八五

字、そして六年生は一八一字、総計一〇〇〇六字です。

そこで、この学年別配当漢字一〇〇〇六字の読み方については、少なくとも低学年のうち、家庭で教えてあげてほしいのです。こと漢字に関しては、学校にまかせておけないケースがほとんどです。そして、漢字力がより容易に身につく時期を逸してしまうのは返す返すも残念なことです。

漢字力はすべての教科、教養の基礎となるものです。ここをしっかりとさせて、読む力、読み取る力の向上につなげれば、あとは子供次第、彼らの好きなように勉強させ、自由になが道を歩ませればいいのです。適切な時期に、適当な学習が何より肝心です。

私は、大脳生理学の見地からいっても、漢字教育は幼児期から始めるのが合理的だと考えますが、小学校低学年のうちならまだ十分に間に合います。この時期を逃さないでください。

漢字の学習を通して、親子のコミュニケーションが図れるのも、もう一つの利点です。「小学校低学年のとき、お母さんやお父さんといっしょに漢字を楽しく覚えました。おかげで本を読むのが大好きになったんですよ——後年、子供の口からこんな言葉を聞くことになったら、最高ではないでしょうか。漢字教育こそ、親から子供に贈るかけがえのない一生物の贈り物です。

親になったからには、子供をりっぱな人間に育てることが、もっとも重要な責務だと思います。どんなに仕事で業績を残したとしても、子供をよりよく育てる以上のものではないはず。りっぱな人間に育てるとは、健全な肉体のみならず、豊かな精神を培うことです。そして、豊かな精神の柱となるのが、心のありさまを表現する国語力であり、わが国の場合でいえば、意味をもつ文字である漢字に強くなることです。

ひるがえって、漢字力を高めることは、語彙を増やすし、言語能力を高めることにつながり、それだけ自分の世界をよりの確に表現できることとなります。

昨今、学級崩壊に象徴されるように子供の情緒不安定が社会的な問題になっていますが、これなども、子供が自分の思いを十二分に表現できるだけの言語能力をもたないために、思いや感情だけが心の内に溜^たまって、遂には情緒不安定な行為として極端なカタチで発露するものと考えられます。ですから、子供の心の安定のためにも、漢字力を向上させることは大きな意味をもつのです。

教育の真髄が“人間育成”であるからには、折りに触れ、家庭教育こそ、その原点であることを認識していただきたいと思えます。

ゲーム感覚、遊び感覚いっぱいの漢字教育

家庭で子供に漢字を教えてやってほしいというと、子供を机に座らせ、親がその横であれこれ指導するという図を描いていませんか。それは、すぐに打ち消してください。

くり返しますが、小学校低学年までは、機械的記銘の能力、つまり丸暗記力に優れていますから、環境さえ整えてやれば、子供は好奇心や探求心をふくらませて、どんどん漢字の読み方をマスターしていきます。要は、子供の好奇心や探求心にスイッチを入れる環境づくりをどうするかが、大きな課題となります。

あなたのお子さんは、何をしているときにいちばん、目を輝かせていますか。そこにヒントがあります。机に向かうのは嫌いな子供でも、遊びやゲームが苦手という子供はいないでしょう。そうです、漢字カードやかるた、絵本、読本などを使って、遊び感

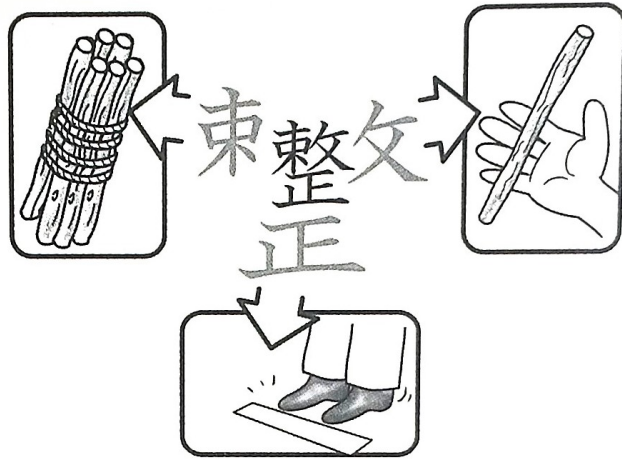
覚、ゲーム感覚で漢字に親しむように工夫してやればいいのです。親子でいっしょに楽しみながら、漢字に強くなっていこうというわけです。親子の密度の濃い触れ合いの時間を、「漢字」を仲立ちにして作ることもなります。

私が提唱してきた石井式漢字教育でも、こうした点を大切にしてきましたが、たしかに、これこそ子供がどんどん漢字が好きになっていく秘訣なのです。具体的な遊びやゲームなどの方法については、4章で紹介しますので参照してください。

部首がわかると初めての漢字でも読める

漢字は字形が複雑だから難しいと思われがちですが、子供にとっては、だからこそそれだけ記憶する“手がかり”が多く存在するということになります。

この“手がかり”の正体を明かすと、それは“部首”なのです。漢字はそもそも、部品



「整」の成り立ち

まず、「整」を大きく分解すると、「束」「攴」「正」の三つになります。「束」は“木”と“〇”(縄で木を束ねる形)を組み合わせた字で、「木」の束を意味します。「攴」は“ノ”(棒または鞭を表す)に“又”(手を表す)を加えたもので、「手に棒または鞭を待つ」という意味を表す部首です。そして、「正」は“一”(線)と“止”(足の裏の形で、止まるの意味)を組み合わせた字で、「止まるべき線に止まる」ことを表し、「正しい」という意味を示します。

これら三つの意味から、「木を束ねると、飛

ともいうべき“部首”を合理的に組み合わせさせて作られています。ですから、部首に着目して全体をとらえると、しっかりと記憶にとどまり、忘れることが少なくなります。また、部首について正しい知識があれば、それによって組み立てられている漢字の意味や読み方がほぼ推察できるともいえます。この合理的、科学的な漢字学習法を研究して作りあげたのが「石井式漢字学習法」です。

ちなみに、常用漢字(日常使うものとして、政府が一九八一年に定めた漢字)は全部で一九四五字ありますが、それに使われている部首は一九〇あまりしかありません。つまり、一九〇あまりの部首について正しい知識をもてば、その十倍以上の一九四五字の漢字の意味や読み方を知る手がかりをもつことができるのです。

では、この「部首手がかり法」で、かなり複雑な字形の「整」という漢字の意味や読み方を推察してみましよう。

び出た所、引つ込んだ所ができて、両端が不揃いになる。そこで、飛び出た所を叩いて引つ込め、両端をきちんと揃うようにすることが、「整」だとわかります。また、「整」の読み方は、「束」ソク「攵」ボク「正」セイのうち、もっとも重要な意味を表す「正」がこれを表します。

こんなふうに「整」の成り立ちを理解していくと、この字の意味や読み方がとてもわかりやすくなってきます。

漢字の成り立ち「象形・指事・会意・形声」

漢字の意味を推し量る手がかりとしては、漢字の成り立ち方について知っておくこともたいへん有効といえます。漢字の成り立ち方は、次の四つにまとめられます。

①象形 この世界には、山とか川、魚とか鳥などといったように具体的な形のあるも

のと、上とか下、大とか小といった具合に形のない抽象的な概念を表すものがあります。す。

このことは、この世界にあるものを文字で表す漢字の成り立ちにも、そのまま当てはまります。象形は、ある具体的な形を象かたどる漢字で、その形をスケッチかたどふうに描いた、いわば絵文字です。

〔例〕山(第2章五二頁参照)、川(五三頁参照)、魚(七三頁参照)、鳥(七四頁参照)

②指事 これは、形を備えていない抽象的な事柄について、その事を符号的に指し示す漢字です。

〔例〕上(第2章五四頁参照)、下(五五頁参照)、小(五六頁参照)、大(五七頁参照)

③会意 これは、意味を合わせることでできた漢字ですが、この世界には象形や指事だけでは表せないたくさんの事柄や思想などがあります。それらを表すために、二つ以上の象形と指事の文字を組み合わせたものです。たとえば、「明」という漢字は「日」と「月」を組み合わせたものです。

〔例〕家(第2章七頁参照)、間(七五頁参照)、育(八二頁参照)、美(八三頁参照)

形声 これは、形と声の両面を備えた漢字です。形は意味を、声は発音を指します。たとえば、「江」という漢字はよく見かけると思いますが、これは水の意味の“氵”と、音を表す“工”コウを組み合わせてできたものです。

〔例〕空(第2章六四頁参照)、齒(八七頁参照)、緑(八九頁参照)、磁(一〇九頁参照)

象形と指事が基本で、それを組み合わせたのが会意と形声というわけです。

ところで、漢字を、その本来の意味と異なる意味で使うことがあります。転注てんちゆう、仮借かしやと呼ばれるものがそれです。前述の象形、指事、会意、形声にこの二つを合わせて

「六書」といいますが、これらについても簡単に説明しておきましょう。

▼転注 車が転々てんてんところがって元の所から離れ、川が流れ流れて海に注ぐように、その漢字の本来の意味が他の意味に移るということです。

〔例〕「楽」は、楽器の象形字で“楽器”が本来の意味ですが、楽器によって演奏される“音楽”の意味に転用します。また、音楽を聞けば楽しいので、“快樂”という使い方も生まれました。

▼**仮借** 漢字の本来の意味に関係なく、その発音を仮に借りるといふことです。音だけあって文字のない言葉を書くのに、同じ音の別の意味の字を借りて当てたものです。

「例」数字の「一〇」を表す漢字がうまく作れなかったために、同音の“十”を借りて、これを表しました(もともと十は「針」を意味する字で、音は「シン」でした。このとき、数字の一〇を意味する言葉の音もシンであったために、同じ音である十を借りて表しました)。そのため、“はり”は“十”に“金”を加えて“針”となったのです。ちなみに「拾(ジユウ・シユウ・ひろう)」を、数字の「十(じゅう)」の意味に使うのも仮借です。

「解字」は漢字学習を格段に面白くする

漢字の成り立ち方を解きあかすことを「解字かいじ」といいます。この方法で漢字を学ぶと、子供はもちろん、漢字はどちらかという苦手だという大人でも、一つひとつの漢字が

もつ意味や情報がとてもよくわかってきます。漢字を知ることには、こんなに楽しいことだったのかと驚かれるにちがいありません。それによって、漢字とより印象深く、より味わい深く、かかわることができるようになるだろうと思います。

たとえば、すでに紹介した「雪」という漢字を思いだしてみてください。子供がこの漢字を教えてもらうときに、こんな方法だったら、しっかり記憶することができるに違いありません。

「この字は、“雨”と“ヨ(手を表す)”とを組み合わせてできているでしょ。『手にのるよ』になった雨』って、さて何でしょうか」「そうです、『雪』です」と、なぜなぞ遊びにするのです。楽しいとなったら、子供は貪欲です。さらに、他の漢字もたくさん知りたがるでしょう。

「じゃあ、この『雷』って字は、どうなっていると思う」「“雨”と“田”の組み合わせよね。

この“田”は、“太鼓”を表しているの。『雨のときに太鼓を鳴らすもの』って、さて何でしょう」「その通り、『雷(神鳴り)』よね」

「では、『雷』の下に、“⌋”が付いた字は何と読むでしょう」「ヒントは、“⌋”はいなびかりを表します」「そう、“電光”の“電”です」

こういう話をしますと、お母さんやお父さんがまず、「漢字って、こんなに面白いものだったんですね」と感に堪えない声をあげます。ところが、これまでの学校教育では、漢字というものが丸暗記一辺倒、それも丸暗記力が低下してから詰め込むという、つまらない教え方をつけてきたので、いまの子供にとっても、さらには昔子供だった大人にとっても漢字がつまらなくて、苦手なものになっているのは仕方のないことかもしれません。

このように、私たち親自身が解字の教育をきちんと受けてきていませんから、この本を読んで漢字の楽しさがわかっていただけたら、ぜひ親子いっしょに学習してもらおうのいいと思います。2章には、解字の楽しさがよくわかる漢字を選びすぐって紹介してあります。まず、お父さん、お母さんが漢字の楽しさを味わってみてください。それは必ず、子供にも伝わっていくものです。

小学校で学習する学年別配当漢字すべての解字が知りたいという方には、私が著した『楽しい漢字教室』(ぎょうせい刊)などをひもといってもらおうと思います。この石井式の漢字辞典を家族の集まる場所に置いて、「この字はどういう成り立ちだろうか」といった疑問を持ったときに、すぐに開けるようにしておくとう便利でしょう。漫画を読むように読んでほしいと思って、できるだけ興味深く説明してありますから、“読み物”として読むのもいいと思います。

中国生まれの音読みと日本生まれの訓読み

漢字の読み方には普通「音」と「訓」があります。「音」は、漢字が日本に取り入れられたときの中国読みのことであり、「訓」は、その漢字に当たるわが国固有の言葉のことです。

「花」という漢字を例に取ると、「音」と「訓」の読み方は次のようになります。中国では「カ」と読むので、「カ」が音読みとなります。「花瓶」かびん「花壇」かだんという使い方がこれです。わが国では、意味としては「はな」という言葉に当たるので、「花」を「はな」と読むようになりました。こうして「はな」という訓読みが生まれました。「花祭」はなまつり「花見」はなみという使い方がこれです。

ところで、中国は、広さからいえばヨーロッパ全体に匹敵するほど、広い国土の国です。そのため、同じ漢字でも、地域によってはだいぶ違った発音をします。

また、漢字は長い年月をかけて日本に伝わってきましたから、時代による発音の変化もあります。わが国に入ってきた時代によって、「漢音」かんおん「呉音」ごおん「唐音」という区別をしています。

漢音は、わが国が中国と正式に国交を結ぶようになって、唐の国都長安の標準的な発音を取り入れたものです。呉音は、中国と正式な国交を結ぶ以前、仏教などの教典とともに取り入れた、揚子江の下流地方(呉と呼ばれる)の発音です。そして、唐音は、唐よりずっと後、明・清の時代の発音です。これを唐音と呼ぶのは、中国人のことを「唐人」とうじんと呼んでいたためです。

「京」「丁」「明」「行」という漢字の読み方について、漢音・呉音・唐音の順に紹介すると、「京」は「ケイ・キョウ・キン」、「丁」は「テイ・チョウ・チン」、「明」は「メイ・ミョウ・ミン」、「行」は「ゴウ・ギョウ・アン」という発音になります。

このように一つの漢字にいくつもの音読みのあることがあります。

また、一つの漢字が、わが国のいくつかの言葉に当たる場合もあって、そのときは一つの漢字がいくつもの訓読みをもつようになりました。

たとえば、「下」という漢字は、「地下」の「か」と、「下水」の「げ」という二つの音読みと、「下町」の「したまち」、「川下」の「かわしも」、「下る」の「くだ」、「下げる」の「ささ」、「下」の「もと」の五つの訓読みというようにたくさん読み方をもっています。

さらに、多くの漢字は、二つ以上が組み合わせられ、熟語として使われます。普通、二つの漢字が組み合わさってきた熟語の読み方は、上を音読みにすれば下も音読み、上を訓読みにすれば下も訓読みということになります。

なお、次のような熟語については、音読みと訓読みの二通りの読み方があります。

▼音読みと訓読みとがある熟語の例

上下(ジョウゲ・うえした)、父母(フボちちはは)、水車(スイシャ・みずぐるま)、年月(ネングツ・としつき)、山道(サンドウ・やまみち)、音色(オンシヨク・ねいろ)、春風(シユンフウ・はるかぜ)、荒野(コウヤ・あれの)

さらに、音読みと訓読みでは、意味の違う熟語もあります。

▼音読みと訓読みでは意味の違う熟語の例

小刀(シヨウトウ・こがたな)、根元(コングン・ねもと)、市場(シジョウ・いちば)、頭数(トウスウ・あたまかず)、勝負(シヨウブ・かちまけ)、燈火(トウカ・ともしび)

ところで、古くからの習慣で、「重箱」のように「上が音読み+下が訓読み」のものや、「湯桶」のように「上が訓読み+下が音読み」のものもあります。俗に、前者のような読み方を「重箱読み」、後者のような読み方を「湯桶読み」といいます。

▼重箱読みの例

ヤクば ダイゼンロ ソウキ
 役場、台所、雑木

▼湯桶読みの例

みホン ばシヨ くみキセム
 見本、場所、組曲

以上、述べたような漢字の読み方についての説明は、子供から質問のあった場合に答えてやればよいでしょう。実際には、読み方をそのまま教えることで、子供に無理なく受け入れられるはずですが、それよりも、小学校低学年ぐらいまでは、反復して学習することを好みますから、読み方を完全にマスターするまで、同じ漢字をくり返し読む機会を多くしてやるのが大切です。

本を楽しく読んであげることが本好きにする秘訣

ここまで漢字の楽しいマスター法を紹介してきましたが、実は一つひとつの漢字をいくらかたくさん覚えられても、それだけでは、漢字は生きた言葉としては子供のなかにうまく定着していきません。本のなかですでに覚えた漢字にもう一度出合うことが大切なのです。

もちろん、本のなかでそれまで知らなかった漢字に出合ったら、解字を通してその成り立ちを理解しながら覚えてしまいうのもいいでしょう。

つまり、漢字の読み方をマスターさせるいちばんよい方法は、本好きにすることなのです。正確には本にかぎらず、漫画でも、新聞でも、チラシでも、手当たり次第、文章を読むようにするといのです。文章を読む中で、漢字の読み方を自然と覚えてしまうことほど、簡単な学習法はありません。

子供を本好きにするコツは、まずはお母さんなり、お父さんなりが、本を読んであげることに始まります。このとき、読み手が心がけなければならぬことは、自身がかから楽しんで本を読むことです。そのことによって、「本って面白いものだな」と一段と強くアピールすることができます。

本は、絵本であっても、望ましいのは漢字かな交じり文であることです。こうした要請に込んでいる出版社『登龍館』の絵本は、漢字かな交じり文になっています。

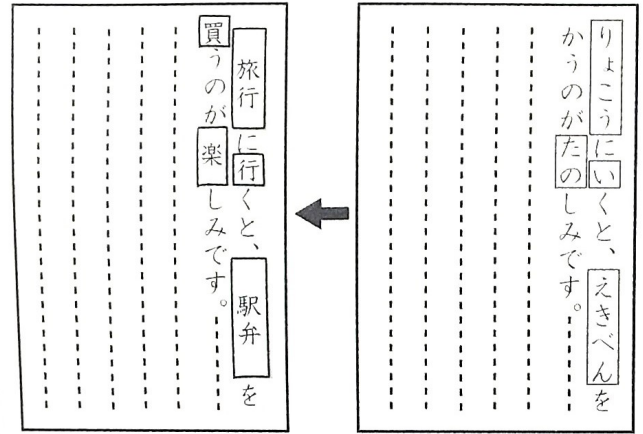
気に入った本であれば、何回でも何十回でも、果ては本がボロボロになるまで、くり返して読んでもらうことを望むのが、小学校低学年ぐらいまでの子供の大きな特長といえます。そうこうしているうちに、その本が漢字かな交じり文で綴^{つづ}られていれば、漢字もすんなり読めるようになってしまうものです。挙げ句は、子供が自分で読むようになります。

この段階まで進んだら、今度は、子供に本を読んでもらいます。「面白かったよ」「上手に読めるようになったのね」などと、前向きな感想を伝えることを忘れないでください。子供は、本の内容をもっと深く理解し、もっと味わい豊かに読み聞かせようと努力するでしょう。

こうして、本が読めるようになるだけでなく、内容を読み取る力もついて、本がますます好きになっていきます。

そのうち、本の中で知らない漢字に出合っても、解字の知恵を働かせたり、前後の文脈から推察したりして、すらすら読んでしまうようになります。

私は長年にわたり、こうして漢字が読めるようになり、本好きになった子供をたくさん見てきています。それだけに、小学校一年生の教科書から、普通に漢字かな交じり文になっていないのが残念でならないのです。ひらがなだけの文章は、読みにくいだ



漢字の紙を貼りつける

けでなく、内容を把握するうえでもたいへん難しいものです。

そこで、私が推奨しているのは、文章のなかで、漢字に置き換えたほうがよいと思われる箇所には、その漢字を書いた紙を貼って、新たに漢字かな交じり文にするという方法です。

ともあれ、漢字力をつけるには、小学校低学年までに、小学校で学習すべき漢字のほとんどを読めるようにすることが勝負を決めるといっていいでしょう。学ばべきことを

を、学ばべき時期にしっかり身につけてこそ、よりよく成長していくことができる肝に銘ずるべきです。

そして、この読む力につながる漢字力という基盤がしっかりとできさえすれば、親の出番はここまでと心得るべきです。その後の勉強は全般にわたって、子供にまかせることです。

小学校高学年はちょうど、子供の自主性が急速に育ってくる時期で、今度はそれを育てることが大事になります。親の心がけとしては、孔子が『論語』の中でいっているように本人にぎりぎりまで孤軍奮闘させ、手を貸さないようにすることが大切です。

憤セザレバ啓セス。

悱セザレバ発セス。

(論語 述而第七)

「いま一步というところでもだえ苦しんでいる、そういう相手でなければ知識を与えてやらない。心では理解しながら、口に出そうとしてうまく表現できなくて苦しんでいる、そういう相手でなければ教え導いてやらない」の意味。

トレーシングペーパーでなぞれば書き取りにも強くなる

「うちの子供は、漢字の書き取りテストの点数が悪いんです。何度も書いて覚えるしかないんだから、五回書いてダメなら、十回書きなさいというんです。それで、漢字というとうんざりしてしまつて、ますます嫌いになつていくようで心配です。漢字の勉強が好きになる、何かいい方法はないでしょうか」といった内容の相談を、親御さんから受けることがよくあります。

子供にとつて、ただひたすら書きなさいといわれるのは面白くも何ともなく、単にマスを埋めることが目的になるのは容易に想像できます。これではやはり、「漢字を書けるようになる」ことが好きになつたり、得意になつたりするのはなかなか難しいでしょう。

先に述べたように、漢字を読むのと書くのでは、脳の働く経路が異なり、漢字を書くときは読むときのように、「目にする」↓「意味を理解する」という具合に、すんなりといかないのが現実です。

漢字を書くときは、①書こうとする漢字を「音でとらえる」②それを「目に見える形にする(全体像をとらえる)」③「漢字に組み立てる」④「手の動きの記憶につなげる」という複雑な経路をたどることになります。

「花」という漢字を書くためには、①「はな」と音でとらえ、②それを「花」という形の全体像にして、③改めて「艹」と「亻」と「匕」として組み立て、④「一

↓ ++ ↓ 艹 ↓ 艸 ↓ 花 ↓ 花”の書き順(手の動き)を思い出すことが求められるわけです。

つまり、読めること、字形を全体的にも部分的にもとらえていること、それを手で表現できること、こうした条件が揃わなければ書けるようにならないということです。

ですから、「漢字を書く」ためにも、漢字を読む力をつけることがたいへん重要になります。そして、漢字を読むことによって、漢字を目にする機会がそれだけ多くなっていけば、おのずと字形をとらえる力をつけることができます。

また、解字、すなわち漢字の成り立ちを学ぶことで、漢字の組み立てに強くなることができます。

そのうえで、実際に何度も手で書く練習を重ねて、手の記憶に強く残すことが必要です。漢字を見ているだけでは、読めるようにはなっても、書けるようにはなりません。

手で書く練習にしても、“たいくつな作業”と決めつけるのは早計で、子供たちが喜んで試みる学習法があります。それは、美しく書かれた漢字の上に、透けて見えるトレーシングペーパーを乗せ、鉛筆などでなぞっていくものです。なぞっただけとはいえ、自分の筆跡が美しい漢字を描き出すのは、子供の心をことのほか喜ばせ、得意にさせます。「先生、もっと書きたい」といって、子供は何回でもやりたがります。楽しみながら、漢字を書く練習ができるのですから、子供にぜひ、このやり方を教えてあげてください。

市販されているものに、漢字の字形を点線で描いたものをなぞらせるようにした漢字練習帳がありますが、これは書き終えたあとで見ると、点線からところどころはみ

出して、あと味がよくありません。トレーシングペーパーで写し書きしたときも、はみ出しているのですが、手本からトレーシングペーパーを離して見ると、はみ出したところが見えないので見た目がよく快感がわいて、もっと書きたくなるのです。同じようでも結果は大違いです。

私はつねづね、小学校低学年ぐらいまではとりわけ、漢字の学習は「読み」に重点的に力を入れ、「書く」ことにはあまりこだわらないほうがいいと言っています。これぐらいまでの子供に、人の顔を見せて、絵に正確に書いてごらんと言っても、そうそうできるものではありません。漢字を書くことは、それぐらい難しいといっているでしょう。ですから、「書く」ことは、「学年別配当漢字」に基づいて徐々にマスターしていけばいいのです。

それよりも家庭において、比較的無理なくマスターできる、漢字の「読み」の学習を学校に先行してどんどん進め、それにともない、本をたくさん読んで、本の面白さに目覚めるようにすることのほうが、生涯にわたる学力や教養の基礎を築くためにたいへん有効といえます。

加えて、パソコンの普及などにより、漢字を書くことは変換機能が代行してくれませんが、その前に、音が同じ漢字がずらりと羅列されるわけで、どの漢字が適当か選択するためには、同音の漢字が識別できなくてはなりません。その意味でも、漢字の「読み」は重要です。こうしたいいくつかの点こそ、私が、漢字の「読み先習」にこだわるゆえんです。